

土岐善麿の新作能「親鸞」をめぐる考察： 浄土真宗の能としての成立過程と「生活派」土岐善 麿の思想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河路, 由佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000345

土岐善麿の新作能「親鸞」をめぐる考察

——浄土真宗の能としての成立過程と「生活派」土岐善麿の思想——

河路 由佳

一. はじめに

土岐善麿（一八八五～一九八〇）は、喜多実（一九〇〇～一九八六）とともに一九三九年に初めての新作能「夢殿」を作ったのを端緒として一九六〇年代半ばまでに十六曲の新作能を発表し、そのうち十二曲を後に残そうと『新作能縁起』（一九七六）に収録した¹⁾。

土岐善麿（以下、善麿）が新たに拓いた能の領域として、増田正造（一九八〇）は、「宗教者をシテとする宗教世界の追求」を一番に挙げている。東京浅草にある真宗大谷派の等光寺の住職、土岐善静（一八五〇～一九〇六）の次男に生まれた善麿にとつて、浄土真宗の教義に忠実な新作能を作ることは第一作「夢殿」以来の宿願で、宗祖たる親鸞をテーマとする新作能「親鸞」は、善麿の「宗教世界への追求」の極まりを示すものである。

また、この作品の前シテは親鸞の妻惠信尼^{えしんに}で、田植え歌

から始まる描き方は、親鸞についてのそれまでの文芸や芸能に前例がない。近代短歌史に「生活派」短歌を打ち立てた歌人、善麿の信条と有機的関連がありそうである。

善麿は多作で、随筆や解説を方々に書いている。本稿では、主として善麿の書いた文章から新作能「親鸞」を読み解いてその特色を考察し、善麿の思想を考える。

原文の引用に際して、本稿では原則として漢字の字体を新字体に改める。また、現代仮名遣いで書かれている文中で拗音促音の小書きが採用されていない場合は、読みやすさのため、小書きに改めて示す。なお、〔…〕とあるのは河路による中略、亀甲括弧に括られた部分は河路による補足である。著作関係以外の土岐善麿の年譜については主として冷水茂太「編」（一九八三）を参照した²⁾。

二・新作能「親鸞」の作者としての土岐善麿

二一・新作能「親鸞」の〈初出版〉（一九五〇）と〈改稿版〉（一九六一）

新作能「親鸞」の詞章が初めて発表されたのは一九五〇年二月、喜多流の機関誌『喜多』（喜多流刊行会）新年号誌上であった。上演の機会がないまま十年を経た一九六〇年の夏、翌年の親鸞聖人七百回大遠忌の法楽の一環として京都東本願寺の能舞台で演じられることが決まり、詞章が大幅に書き換えられ節付けや演出が具体化されて、喜多流の謡本（うたほん）に加わった。それまでの善麿の新作能と同様に、能楽師の喜多実との二人三脚で、京都での上演当日は、喜多実がシテを演じた。

本稿では便宜上、書き換え前の詞章を〈初出版〉、書き換え後の詞章を〈改稿版〉と呼ぶ。演じられた新作能「親鸞」の詞章は、即ち〈改稿版〉である。

二二・土岐善麿の一九五〇年代

新作能「親鸞」の〈初出版〉から〈改稿版〉、上演に至る年月はちょうど一九五〇年代、善麿の六十代半ばから七十代半ばに当たる。未だ連合国軍の占領下の戦後日本で、文字通り焼け跡から立ちあがった善麿が書いたのが新作能「親鸞」の〈初出版〉であった。

善麿は一九四〇年に朝日新聞社を定年退職したあと、本当にやりたかったことをしようと書齋生活に入った。⁽⁵⁾善麿にとつて戦争の傷は浅いものではなかったが、戦争中に没頭した田安宗武の研究が戦後、善麿の後半生を拓いたのだった。一九四七年五月に学士院賞を受け、翌年一月には早稲田大学から博士号が与えられ、学究の道を歩み始めたのである。善麿は一九四七年度に母校早稲田大学の講師に着任して上代文学の講義を窪田空穂から引き継ぎ、一九五五年度の定年まで務め上げた。並行して一九四八年の秋からは、京都にある真宗大谷派の大谷大学でも講師として年に五回（一回につき二時間三日で合計三〇時間）の集中講義を担当した。大谷大学は、かつて父善静が講師を務め、幼い善麿が通った大谷教校につながる学園である。なお、善麿の随筆「余暇の京都」（土岐一九六五、一〇四～五頁）によると、この時の大谷大学には、阿弥陀如来が「無量寿（永遠の生命）」であることにあやかつて定年がなかったという（一〇五頁）。善麿は八十代後半まで講義を続けた。

一九四八年には東本願寺における蓮如上人四百五十回忌に際し依頼を受けて交声曲（カンタータ）「蓮如」の歌詞を書き、同じく浄土真宗の寺に生まれた清水脩（しみずおさむ）の作曲で同年四月二十四日、日比谷公会堂で演奏された。清水脩と組んで宗教的な楽曲を作ることこのあとと続き、一九五二年四月八日の全日本仏教青年会同盟の花まつりには交声曲

「降誕賛歌」が同じく日比谷公会堂で演奏された。

一九五四年暮れには全日本仏教会や東京仏教団の代表者から、父善静がかつて書いた「法のみやま」に代わる新しい仏教徒の歌をとの依頼を受け、「ああ このよろこび」を書いた。作曲は複数の候補から平井康三郎のものが採用され、一九五五年二月十五日に朝日生命本社八階ホールでの「ねはん会」で発表され、父の作詞した「法のみやま」と両面で一枚のレコードになった。善麿は随筆「仏教徒の歌」（土岐一九五五、一八三〜九頁）でこれを喜び、「宗教的な心境を表白し得たことは、感謝しなければならぬ（一八九頁）」と書いている。

このようにこの時期の善麿は仏教との縁を深め、古典文学に造詣深く柳営連歌の宗匠でもあった僧侶の父、善静の影響を思わないわけにはいかなかった。善麿は二十一歳で父を失っている。旧民法における「長子相続（家督相続）」制度の下、寺は兄、静が継ぎ、善麿は自由であった。哀果と名乗った青年時代にはロシア文学に傾倒し、社会主義に関心を寄せ、ローマ字やエスペラント語の普及に尽力し、短歌においてもローマ字三行書きや自由律に挑むなど進取の気質を発揮したが、敗戦を挟んで環境の一変した一九五〇年代以降は、幼時からの浄土真宗の教えを意識する機会が増えたようである。

随筆集『目前心後』（一九六三B）の「あとがき」に「こ

のころしきりに父のことが想い出される（二七四頁）」と書いている。同書所収の随筆「因縁の幸福」（二四八〜五〇頁）では、小学校入学前に通っていた大谷教校を回想している。大谷教校は浄土真宗の子弟の学ぶ高等教育機関で善静が講師の一人であった。特異なことには、父の方針で善麿は七歳から二年ほど大人に交じって大谷教校で仏教教育を受けた。さらに父から論語を習い、近くの光円寺で三部経や和讃を教わった。また、雅楽の筆楽を習い、法要で演奏することもあった。お寺の「かわいいポッチャン（二四九頁）」として英才教育を受けて育ったのである。九歳になって浅草尋常高等小学校の三年生に編入された。こうして幼い頃から深く身に備わった宗教的な素養を意識し、表現する機会が増えたのが、新作能「親鸞」を書いたころの善麿であった。

また、一九五〇年代の善麿は、多くの新作能を書いてはその上演を見とどけている。一九五〇年には戦争中から温めてきた「実朝」を新作能に仕上げて同年十一月に染井能楽堂で初演を見た。翌一九五一年には中尊寺の依頼による「秀衡」を書き、同年十一月に中尊寺能舞台で初演、一九五二年には「綾鼓」を書いて十二月に染井能楽堂にて初演、一九五三年には旧作「青衣女人」が大阪で上演された。一九五七年には「四面楚歌」を発表、翌年一月に喜多能楽堂で初演され、同年秋に脱稿した「鶴」は一九五九年一月、

喜多能楽堂で演じられた。一九六〇年春には初めてキリスト教の「使徒パウロ」を書き十一月には朝日講堂での初演が好評を博す、と立て続けの活躍ぶりである。「親鸞」上演の迫る一九六一年二月の喜多会では、記念碑的な第一作で聖徳太子を讃える「夢殿」の「四度目の上演（喜多流刊行会一九六一、三頁）」も行われた。この頃の喜多流機関誌『喜多春秋32』には「このところ新作能が急ピッチで上演され、各職分は土岐（善麿）博士や（喜多）実師の調子に追いつけず、（…）謄写版の新曲本と血眼でにらめっこからの態は悲愴の限り」とある。

なお、一九五〇年には戸川秋骨の『謡曲物語』に「謡曲と能楽との関係について」と題する長文の解説（二一〇―二三五頁）を書き、一九五四年には能という舞台芸術全般の解説と主要な曲目の要約を取めた英文の解説書『Japanese No Plays』（日本交通公社）を出版している。能の専門家としての風格が備わってきた。

二―三、土岐善麿の追求した浄土真宗の能の理想

戦後の善麿は浄土真宗に因む仕事が増え、「寺に生まれたことも因縁であろうが、そこがたまたま浄土真宗の寺であったことは、そのまま僕の一生の幸福でもあった（土岐一九六三B、二五〇頁）」という思いに至った。もともと、一九三九年の「夢殿」に際して善麿が考えた「聖徳太子奉

讃の一曲が現行曲として存在していいはずであり、むしろ無ければならない（土岐一九四四、七七頁）」という思いは、親鸞が日本仏教の祖と敬った聖徳太子への敬愛が浄土真宗の教えとともに善麿に備わっていたことを思わせる。では、善麿は、浄土真宗の教義と能をどのように考えていたのだろうか。

一九五五年に刊行された『摂取の能面』所収の「新作能おほえ書き」（二四七―二五六頁）において善麿は「現行曲のうち、じゅんすいに浄土真宗の教義をあらわしたものはほとんどない（二五二―二五三頁）」と述べる。随筆「能の仏教性」（土岐一九六五、一二四―七頁）において、善麿は、能に描かれる仏教が「主として浄土教と禅である」のは、中世の状況に適応していて、「芸能者の立場からも、当然な方針であり処置であった」と理解を示し、「神事にはじまって田楽の要素を摂取した猿楽の能が、そこまで発展したことは、創成者である観阿弥、世阿弥の、すぐれた才能によるもので」、この父子や継承者たちが作者として演者として練り上げてきた能の表現は「まことに非凡」であるとして、「これを幽玄美の理念をもって情熱化し、詩化し、歌舞二曲によって自由自在に律動化した（同右）」ことを賞賛している。能の作者の立場から世阿弥の伝書を熟読し、その名作を味読した善麿には、深く感じるところがあったようである。その上で、善麿がなすべきは、ここに「真

宗物」を加えることであった。

典型的な複式夢幻能では、前場で成仏できずにいる古人の亡霊が姿を変えて（前シテ）現れてワキの僧に回向を乞い、後場では本来の姿を現して（後シテ）舞い、僧の廻向によって成仏するという形をとる。この「廻向による救済解脱ということが〔浄土往生を説く〕真宗にはないので、前シテと後シテの関係がつきにくい（土岐一九五五、二三―三五頁）」ことが「真宗物」の課題だと善麿は考える。何とかしなければならぬ。善麿は浄土真宗の能の開拓を志し、次のように述べている。

〔…〕「真宗物」ともいふべきものを数番作り得たとき、それらを京都の両本願寺において、おのおのその記念の舞台にのぼせるような機会があったら、すくなくとも世阿弥のいう「珍しき」ものを能楽に加える機会になるかと考える。そしてそれが「おもしろき」ものとしても迎えられることになれば、浄土真宗の信仰生活に、この古典芸術の「花」をさかせることにならぬものでもあるまい。（土岐一九五五、二五―三頁）

善麿は既に戦国時代から安土桃山時代に生きた浄土真宗の僧、顕如を新作能にしている。戦争中の一九四二年四月の三百五十回遠忌に際して依頼を受け、短期間で書き上げ

た。善麿はこの新作能「顕如」について「その内容理念において、現行曲中浄土真宗の教義を宣揚した唯一のものといひ得る（土岐一九四四、九五頁）」と書いていた。前シテは石山合戦に奮闘した軍師鈴木飛騨守重幸の亡霊で、後場は「浄土の莊嚴」を表現したという。天女（後シテ）が現れて舞うのはそのためである。

このように辿つてくると、浄土真宗の教義を表す能を作りたいとの思いは善麿の宿願であったことが分かる。戦争中の「顕如」は、四月に京都の東本願寺で行われるはずだった公演が空襲警報で中止となり、代わりに十一月に東京で上演された。自分が書いた「真宗物」が京都の本願寺で上演されるという善麿の夢は持ち越されていた。

二―四 「生活派」の歌人、土岐善麿の求めた叙事詩的抒情

善麿が新作能に新たに拓いた領域について、増田（一九八〇）は、「宗教者をシテとする宗教世界の追求」と合わせて、「新しい人物像を能舞台のせたこと」と「鮮明なイメージをそのまま能に創」つたことを挙げている。

過去の人物を身近に引き寄せて鮮明なイメージで描き出す、即ち歴史的人物を生活者として描く、ということとは、一九五〇年代の善麿の短歌におけるテーマでもあった。近代短歌史において石川啄木と土岐哀果（善麿の一九一八年半

ばまでの筆名)の「生活派」と呼ばれた作品のありかたが、その後の短歌に大きな影響を与えたことに異論はない。啄木と計画した文芸誌「樹木と果实」は未刊に終わったが、啄木の死後、この計画を継いで善麿が一九一三年九月に創刊した『生活と芸術』は一九一六年六月号まで続いた。集まった「生活派」歌人の一部は後に口語短歌やプロレタリア短歌を作るようになるが、善麿は単独で独自の道を歩んだ。

一九五〇年代、月刊誌『短歌』や『短歌研究』で近代短歌史が特集されると、「生活派」の源流として善麿が取り上げられることが増える。自らの生活、生き方を短歌に表現するスタイルは、今日では新聞等の投稿歌はほぼその範疇にあると言えるほどである。「短歌は誰のためのものか」(土岐一九五八B)と題する文章で善麿は「作者のためのもの」と断言し、如何に生きているかの「証拠になるような自己表現の一つの方式として」書くのだと述べている。石川啄木が「一生に二度とは帰って来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ」と書いたのと軌を一にする善麿の信条であった。

その善麿が、一九五〇年代になって挑んだのは古代の人物に成り代わってつくる連作で、『歴史の中の生活者』(一

九五八)と題された歌集には、それぞれ日本武尊やまとたけのみこと、雄略天皇、天武天皇に成り代わって作った「倭建抄」やまとたけ、「大長谷抄」おほなかつせ、「大海人抄」おあまが収められている。その後も「相聞抄」(軽の太子)かろ、「額田抄」(額田王)ぬかたのおおみがあつてそれぞれ同名の歌集に収められ、晩年の『天の原ふりさけみれば』(一九七六)の冒頭にも同じ要領で阿倍仲麻呂を扱った「望郷古逸抄」がある。これを善麿は叙事詩的抒情と名付け、「生活派」の短歌が「日常些末の事実」を書くことに陥って衰弱するのを救うための試みだと(土岐一九五八A、一九八頁)述べている。歴史上の人物を「生活者」として追体験して「抒情する」姿勢は、新作能「親鸞」において、前場の田植えの場面で恵信尼を生活者として描き出したところにもうかがえる。

三・新作能「親鸞」の主な本説

能においては世阿弥以来、典拠、出典を「本説」と呼ぶ。善麿も本説を大切にされた。新作能「親鸞」は、親鸞とその妻恵信尼に関する本説によって構成されている。主たる四つの本説を取り上げ、それについての善麿の思いを確認する。

三―一・親鸞の田植え歌：真仏寺の石碑

前場が稲田の田植えの場面に始まるのは(初出版)も(改

稿版)も変わらない。里人が田植え歌を歌いながら田植えしているところに前シテ惠信尼が現われる。そして、親鸞・惠信尼一家が農民たちの中で暮らしていたころのように田植えに加わる。

この田植え歌は、茨城県水戸にある真仏寺に伝わるもので、『真仏寺略縁起』によると、親鸞がこの地で農作業に忙しい人々に念仏を教えようと、自ら泥田に入って田植えを手伝いながらこの田植歌を歌って人々を導いたという。歌詞の全文は次のとおりである。

五劫思惟の苗代に 兆載永劫のしろをして
 一念帰命の種をおろし 自力雑行の草を取り
 念々相統の水を流し 往生の秋になりぬれば

この実とるこそ嬉しけれ

三十二、惠信尼の下妻の夢告：「惠信尼消息」より

前シテが、親鸞の妻、惠信尼であることも(初出版)から変わらない。ワキの旅僧が語って聞かせよと求めるのは惠信尼が見た「下妻の夢想」で、典拠は「惠信尼消息」である。

「惠信尼消息」が京都西本願寺で発見されたのは、一九二一(大正十)年、善麿、三十六歳の年であった。越後の惠信尼が京都に住む末娘の覚信尼へ書き送った十通の手紙

で、一二五六(建長八)年、惠信尼七十四歳、覚信尼三十二歳、親鸞八十三歳の年の第一通から、一二六二(弘長二)年、親鸞の死の知らせを受けた第三通を経て、一二六八(文永五)年、惠信尼八十六歳の第十通までが、よい状態でみつかった。

「下妻の夢想」は、第三通(一二六二年十二月一日付の覚信尼からの手紙への返信)に書かれている。結婚して十数年、子どもを伴って一家で越後から移り住んだ常陸の国下妻で惠信尼が見た夢である。夢に二幅の絵像が現われ、形がなく光ばかりの方は勢至菩薩で法然、もう片方の観音菩薩は親鸞だと教えられたというもので、惠信尼はもったいなくて口外しなかったが、夫、親鸞を観音の化身だと心得たという。

善麿は、随筆「惠信尼消息」(土岐一九六七、二〇七)二一〇頁)で、京都で親鸞の死をみとった娘からの手紙への返信(第五通)にかつての親鸞の様子がありありと描写されていることに注目し、八十歳を超えた惠信尼の「記憶力の強さ」(…)その表現力の自然な真実さ、その教養の高さに感嘆せざるをえない(二〇九頁)と称えている。実際、この手紙によって惠信尼の実在が確かになり、その人柄や教養の高さ、仏教理解の深さ、また、夫と離れて暮らす生活力の逞しさが証明されたのだった。

三―三、親鸞の「述懐」：『歎異抄』より

新作能「親鸞」の詞章で最も大切なことばが『歎異抄』後序に書かれた親鸞の「述懐」であることも、〈初出版〉から変わらない。改稿の前後で演出が変わったことについては、四章、五章で述べる。「述懐」の原文は次のとおりである。

弥陀みだの五劫ごこうし思惟しゆいの願がんをよくよく案ずれば、ひとへに、親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業ごうをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

千葉乗隆（千葉「訳注」二〇〇一、一一二頁）は「阿弥陀さまが、五劫という永いあいだお考えになって、すべてのいのちあるものを救おうとしてたてられた誓願を、よくよく考えてみますと、それはひとえに、この親鸞一人を救ってくださるためでした。かえりみますと、わたしはそれほど罪深い身であるにもかかわらず、かならず助けるぞと思立たれた、阿弥陀さまのご本願の、なんとありがたいことであろうよ」と現代語訳している。

善麿はこの「述懐」に特別な思いをもっていた。随想「私との対話」（土岐一九六五、一二〇～一二三頁）で、「述懐」を引用し「このことばのすばらしさ、その深さ、大きさ、

広さ」を思うとき、「無量光、無量寿」すなわち、無限の空間や時間を感じ、「ぼくはじぶんのからだを世界の中に、宇宙の中においているように思うのである。（一二三頁）」と書いている。

随筆「法楽縁起」（土岐一九六三B、一一～一二三頁）では、「親鸞一人が立っているとは、同時に、人間すべてが立っているということになる。（…）弥陀が一親鸞の中に、すなわち衆生の中に、人類の中にみちあふれてきたかたちで『親鸞一人がためなりけり』の法悦にひたり得た。（一二三頁）」と書き、土岐（一九六四）においても、親鸞の到達した境地は「親らん一人のためなり」ということで、これは「自分がすくわれたということ、他のみんなが自分と同じようにすくわれるのだということを書いて（七頁）」と説いている。

三―四、親鸞の六角堂の夢告：『御伝鈔』より

親鸞の伝記として早くから知られてきたのは親鸞の曾孫（覚信尼の娘である覚恵の息子）覚如の作と伝える『本願寺聖人伝絵』で、絵の部分を『御絵伝』、文章を抜き出したものを『御伝鈔』と呼ぶ。その上巻第三段「六角夢想」が、若き日の親鸞の六角堂で見た夢の話である。二十九歳の親鸞が比叡山を降り、六角堂に百日間の参籠をしていた建仁三（一二〇三）年四月六日の明け方、夢に救世菩薩が現わ

れて七言四句のお告げを伝えた。

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯
ぎやくしゆくほうせつにょぼん りんじょうしよくん
 一生之間能壯嚴 臨終引導生極楽
いっしょうのあひだにさうげん りんじゆういどうしよくてくらく

というもので、「将来あなたは結婚するだろうが、その時、わたしがあなたの妻となり、必ず極楽に導こう」という意味で、この救世観音は聖徳太子の本地「本来の姿」であると説明されている。「非僧非俗」の「愚禿積、親鸞」として家庭を持ち、庶民の中で生活しながら教えを説く生き方に親鸞を導いた大事な夢告であり、将来の妻が観音の化身であるということから、親鸞にとって恵信尼が観音の化身であったと解釈される。

恵信尼の下妻の夢告とあわせると、親鸞と恵信尼は、互いに互いを観音の化身と思ったことになる。恵信尼と親鸞の関係について、土岐（一九六四）は次のように語っている。

〔…〕恵心尼は、親らんをかんん様の化身だと思っ
 てつかえてきたのです。

親らんも自分が結婚すればそのときは、かんん様と結婚するのだと思っていたのです。二人はそれぞれお互いにかんん様だと思ってくらしてきたのです。〔…〕このお互いが尊敬してくらせるくらいよいこと

はありません。（九頁）

この夫婦の相敬い合う関係を、善麿は自らの夫婦の在り方の理想とも考えたようである。

四、新作能「親鸞」の詞章——〈初出版〉（二九五〇）から〈改稿版〉（二九六二）へ

確認した新作能「親鸞」の詞章の六種を、年代順に並べて示す。

- (1) 一九五〇年二月『喜多』（第四輯新春号）、喜多流行会、一六〇一七頁
- (2) 一九五五年四月『大法輪』（第二十二卷第四号）、大法輪閣、五六〇六〇頁
- (3) 一九五五年六月『撰取の能面』大法輪閣、二九四〇三〇〇頁
- (4) 一九六〇年十二月『額田抄』初音書房、一一三〇一八頁
- (5) 一九六一年四月『親鸞』（喜多流謡本）（全十八頁）喜多流刊行会
- (6) 一九七六年六月『新作能縁起』光風社書店、一五九〇一六三頁

(田中充「編」(一九九〇)が上記を校合したテキストを掲載している。)

このうち(1)から(3)までが(初出版)、(4)から(6)が(改稿版)である。順に確認しながら、二種の違いを検討し、新作能「親鸞」完成への道筋をたどる。

四一・新作能「親鸞」作成のきっかけ

新作能「親鸞」は、一九五〇年二月の「喜多」(第四輯新春号)の中ほどの二ページに初めて発表された。喜多実(一九六二)は、その経緯について、不自由な状況で迎えた戦後早期に各流派の能楽関係者らで作った宗教芸術会の会合が築地の西本願寺別院で開かれた折、キリストと親鸞を能にしようということになり、前者は観世流、後者は真宗出身の土岐善磨が作るのがよいからと喜多流で担当することになったと説明している。「従って『親鸞』は戦後の第一作ということになり、(…)次に『実朝』が一気に作られた。(喜多一九六一、二頁)」という。この集まりに善磨もいたとあるが、善磨はこれに触れたことがない。

当時、上演の予定があったわけではなく、いわば作者の私案試作として公にしたものである。その理由は、戦時中、本山からの委嘱をうけた「顕如」が上演され、また戦後(昭和)二十三年四月二十四日に、交声曲「蓮

如」が清水脩氏の作曲により、「宗教音楽の合唱と管弦楽演奏会」で日比谷公会堂に発表されたことがあったため、わたくしとしては、宗祖親鸞に関する題材のものを任意にまとめておいたのである。(土岐一九七六A、一六六頁)

と書くばかりである。会合での経緯があったとしても、善磨にとつてそれは重要ではなく、「夢殿」で「聖徳太子奉賛」の思いを書きたいと思ったのと同じように、親鸞への敬愛の念を書きたい思いが大きかったのだろう。

四一・二。(初出版)のテキスト

『喜多』初出のテキストは、漢字は旧字体で振り仮名、句読点はなく「中人」で改行があるだけで、前場も後場も改行なしに詰められている。武蔵野大学にご遺族から寄贈された本誌を閲覧したところ、十五か所ほどの誤字脱字に對し、善磨による修正の書き入れが認められた。後場に弁円済度の物語が入っているのは(初出版)の特色である。

体裁を整えて作者のことばとあわせて掲載されたのは一九五五年四月の『大法輪』(第二十二巻第四号)誌上で、小さな文字で二ページと二行、語り手ごとに改行され、句読点がつけられた。漢字の字体は旧字体でふりがなは歴史的仮名遣い、字音仮名遣いである。詞章を照合すると、『喜

多」版での修正の書き込みはほぼ反映されている。漢字遣いの修正として、親鸞について「上人」とあった二か所が「聖人」に、「恵信尼」の漢字の「心」が「信」に改まった。一方、弁円済度の話の中で「み声は霧のふもとに」の部分の「霧」が『大法輪』では「露」になっているが、これは後者が誤りである。

同じ年、六月に同じ大法輪閣から出版された『撰取の能面』^⑬にも「親鸞」が収められている。五ページにわたるゆつたりしたレイアウトである。語り手ごとくに改行され、漢字は新字体で現代仮名遣いによる振り仮名と句読点がつき、読みやすくなった。また、題名「親鸞」のあとに「して恵信尼／後して 親鸞／わき 旅僧」と明記されている。

〈改稿版〉の後シテの解釈は本作の理解において重要で、本稿第五章で考察するが、〈初出版〉では親鸞であった。詞章を照合するとこれが最終版と言えそうだが、冒頭の「衣手冷ゆる草枕」のくり返しがなくなっているのと、後半、二九九頁の交互であるべき台詞割が、「して、して、わき、わき」とあるのは、誤りである。三本を校合した詞章を、今日読みやすい表記（漢字と仮名の使い分け、送り仮名などを調整、振り仮名は現代仮名遣い）にしたものを作成した（本論文の最後の【資料】）。

四―三、〈初出版〉の上演を困難にした課題

『大法輪』（一九五五年四月号）誌上の土岐善麿による「新作能『親鸞』（五六―六〇頁）」は、全五ページの中程に能の詞章を挟み、前後の三ページ分は解説である。そこで善麿は、絵で見ると親鸞の衣や袈裟は墨色だが、それが観音にも見えるように、というのが作者の注文だと述べ、「何とか私の生きているうちに」舞台を見たいと希望している。

しかるにこのとき、「親鸞」上演の見込みはたたなかつた。その理由を善麿は「主として後シテの面と装束と演出について、〔喜多〕実氏の考案が熟さなためである（一九五五、二五四頁）」と述べ、「親鸞が観音であり、観音が親鸞である、という表現の意図を能楽的に処理することの困難は、ほくにも推察される（同、二五四―五頁）」と書いている。

これについて喜多（一九六二）は、「（一九五〇年に）出来上がった当時の「親鸞」は実のところ、私としては自信が持てなかった。何となく上演に踏み切る気持になれないものがあつた。〔…〕そして「親鸞」の原本はすっかり節付されたまま、私の筐底に埋もれたまま、或は陽の目を見ないで済んでしまうのではないかと思っていた。」と振り返る。このままでは、「親鸞」は「利休」と同じく上演の機会がないまま埋もれる可能性があつた。

四一四 新作能「親鸞」改稿へのきっかけ

「親鸞」上演計画が息を吹き返す契機をつくったのは善麿であった。喜多（一九六一）によると、一九六〇年に善麿が京都の大谷大学の講義に出向いた折、東本願寺の関係者から親鸞七百回大遠忌の式能の話が出て、善麿が新作能「親鸞」の話をしたのをきっかけに、先方から上演の希望が伝えられ、善麿は喜多実と相談しながら上演のための改稿にとりかかった。この大遠忌に善麿は東本願寺から交声曲（カンタータ）の作詞を委嘱されており、交声曲「歎異抄」と並行して、新作能「親鸞」を仕上げたことになる。（改稿版）の詞章は、善麿の歌集『額田抄』（一九六〇）の巻末（一一三―八頁）に発表された。

四一五 〈改稿版〉のテキスト

〈改稿版〉は〈初出版〉に比べ、文字数が約二五〇〇字から一七〇〇字へと約七割になった。全体に圧縮されたが、特に後場の改変が著しい。弁円済度の話は省かれ、後シテが「親鸞」から「観音の化身」に変わった。

東本願寺での上演に合わせて、一九六一年四月付で喜多流の謡本『親鸞』が刊行された。詞章の文字は善麿が毛筆で書いた。同年五月の『在家仏教』の「某月某日」（土岐一九六一C）に善麿は、喜多実の要望で書くことになったが、個性を保ちつつ癖を抑えるのに苦労し、「わずか八枚

ばかりのものに半日以上もかかってしまった」と、上演を目前に昂揚した筆致で書いている。詞章は「親鸞聖人七百回大遠忌本願寺式能」のパンフレットにも掲載された。『額田抄』のテキストと照合すると、「恵信尼」の漢字が「心」から「信」に修正されるなど文字使いに若干の違いがある程度でほぼ同一である。後場の親鸞の「述懐」の一部が「そくばくの業を持ちける身にてありながら」とあり、ご遺族から寄贈された武蔵野大学所蔵の謡本では「ながら」の右に善麿が赤で「けるを」と書き込んでいる。『歎異抄』の本文を見ると「けるを」が正しく、『新作能縁起』（一九七六）では修正された。謡本は表音式仮名遣いの片仮名（「大道」を「ダイドオ」など）で振り仮名がついている。

『新作能縁起』（一九七六）所収のテキストは句読点が付いて読みやすくなった。田中充一編（一九九〇）は上記テキストを校合し、振り仮名は謡本のカタカナ表音式を採用している。筆者は、〈初出版〉と同様、漢字の字体を現代のものに改め、振り仮名は現代仮名遣いにするほか、文字使いを現代読みやすいように整えて（漢字を仮名に、又は仮名を漢字に）〈初出版〉と〈改稿版〉の表記法を統一して対照させた表を作成した。本論文の最後に【資料】として掲げる。

四一六、〈改稿版〉は〈初出版〉の課題をどう克服したか
 さて、後場の難題はどう克服されたのだろうか。まず後
 シテを「親鸞」から「観音化身」に変えた。善麿は随筆「恵
 信尼消息」（土岐一九六七、二〇七―二〇頁）で「親鸞を親
 音の化身と感得した恵信尼を前シテにして稲田の情景の中
 に演出し、これに「親鸞の」六角堂の夢告をあわせて、後
 シテを観音化身の舞とする構想、構成とした（二〇七―八
 頁）」と述べている。懸案の面、装束については、謡本に
 後シテの面は「太子」、装束は「天冠、カシキ髪、差貫、
 舞衣、掛絡」と書かれている。『御伝絵』（真宗大谷派の寺
 院用「四幅御絵伝」）では、六角堂の夢告を伝える観音菩薩
 は白い袈裟を着て白蓮華に座す僧の姿だが、新作能「親鸞」
 の後シテは華やかである。

「太子」面は、聖徳太子を模したもので「夢殿」にも使
 われた。実際、法隆寺六角堂の救世観音菩薩像は聖徳太子
 の姿を写したと伝えられている。観音化身は聖徳太子でも
 あるという演出意図がこの面によって明確になった。「天
 冠」は通常、能では神格をもった女性に用いられる金冠で、「カ
 シキ髪」は半僧半俗の少年の役などに用いられる前髪を上
 げて後ろに長く垂らした髪型である。「差貫」は高貴な人
 物用の袴の一種、「舞衣」は男女を問わず舞うための華や
 かな装束、「掛絡」は高僧などの袈裟の一種である。武蔵
 野大学所蔵の写真を見ると、「羽衣」の天女のような天冠

が目立ち、舞姿が女性にも見えるが、面も装束も男性用の
 ものである。観音菩薩に性別はないとされ、親鸞と恵信尼
 は互いに互いを観音化身と感じていた。観音化身は、親鸞
 で恵信尼で聖徳太子でもある。法隆寺六角堂の救世観音像
 を思わせるこの後シテの姿が決まったとき、問題は解決さ
 れたものと思われる。

五. 新作能「親鸞」の特色

こうして新作能「親鸞」は完成し、一九六一年四月二十
 九日、善麿念願の東本願寺の能舞台で、親鸞聖人の七百回
 御遠忌の式能という願ってもない形で演じられた。本章で
 は、上演された新作能「親鸞」の特色を五つに整理して論
 じる。

五―一. 従来の「親鸞物」と異なる本説のとりあげかた
 善麿は、人間としての親鸞、恵信尼についての信頼でき
 る本説を選んで構成した。その新しさは、他の浄瑠璃や謡
 曲と比べると引き立つ。古典文庫の田中充「編』『未刊謡
 曲集』の三、六、十九、統一に、近代以前の「親鸞物」の
 謡曲が合わせて五曲あるが、うち四曲は「板敷山」と題さ
 れ、弁円済度の物語を本説としている。『御伝鈔』の第三
 段の「弁円済度」の物語は、板敷山の山伏、弁円が親鸞を
 憎んで殺害を企てたが、待ち伏せしてもうまくいかず、直

接庵室を訪ねて親鸞の姿に接したところ、自らの過ちに気づき後悔の念に打たれ、明法坊と名を変えて真宗の僧となったという話である。残りの一曲「箱根竜神」は親鸞のもとに現れた竜神が念仏の功德を受ける話である。真鍋廣濟「編」『親鸞文学集』には古浄瑠璃が五曲、収録されている。浄瑠璃や歌舞伎は一演目が長く、『御伝記』等のエピソードをつなげて親鸞の一生を描く「親鸞物」が江戸時代よく知られていたという。「しんらん記」が三種、ほかは「浄土さんたん記并おはら問答」「よこそねの平太郎」という題で、「しんらん」の名を曲名に用いないのは、東本願寺より「親鸞ものの上演・出版が差し止められたことによる（真鍋「編」一九六三、一九七頁）」という。

一方、西野（二〇〇五）によると、一九〇四年～二〇〇四年の間に作られた新作能の中に親鸞を扱ったものは善磨の「親鸞」のほかに三曲ある。竹中実「観世流」による「親鸞」(一九四二)と「本願寺」(一九五二)、そして、百瀬誠彦「観世流」による「親鸞」(一九七九)である。竹中も百瀬も「親鸞」は弁円済度の物語によっている。竹中の「本願寺」は、本願寺に親鸞の霊が現れて浄土真宗の教義を説くというものである。

恵信尼消息の発見後、昭和に入っても「親鸞物」といえば弁円済度の物語が繰り返され、親鸞が神格を持つ存在として描かれているのを見ると、田植え歌や恵信尼の夢告を

入れた意匠が如何に斬新であったかが分かる。

五―二. 前シテを女性にしたこと

妻の恵信尼を前シテに据えたのは前例のないものだが、善磨の新作能には、主人公が女性である「青衣女人」「鶴」の他、主人公が男性でも女性が登場するものが他にもある。「秀衡」の後シテは男性（秀衡の霊）だが、前シテは女性（西城戸の館の侍女）である。「四面楚歌」の前シテは老翁、後場に後シテの項羽の霊とともにツレとして女性（虞美人）が登場する。キリスト教を扱った「復活」の後シテはイエスで、前シテは女性（マグダラのマリア）である。「顕如」の後シテが天女の姿なのは浄土真宗的演出による「天女の散華」（謡本『顕如』冒頭の「曲趣」）で特殊かもしれないが、男性が主人公でも、女性が舞台に現れるものが十曲中少なくとも四曲あるのは、善磨特有のバランス感覚のなせる特色といつてよい。

女性の活躍に善磨は読売新聞社の記者であったころから関心を寄せ、二十代後半の一九一二年五月五日から六月十三日まで、連載記事「新しい女」を二十五回分書いたことがある。パリへ出発直前の与謝野晶子に取材した第一回から、ほぼ毎日、活躍中の女性を訪ねては書いた¹⁵⁾。この時、善磨は結婚三年目で二人目の娘を授かったばかりであった。大正時代は女性の社会進出が目立ち始めたものの、女

性を法的無能力者とみなす旧民法の下、夫が妻を支配することも珍しくなかったが、善麿はそうではなかった¹⁶⁾。新しい文化や思想を先取りしようとしていた善麿は、女性観も新しかったのかもしれないが、鎌倉時代の女性の力が小さくなくなったことは恵信尼や同時代の北條政子を見ると分かる。男尊女卑思想が必ずしも日本文化の本質ではないことを善麿は感じ取っていたのかもしれない。

五―三、前場で生活者としての親鸞・恵信尼を表したこと

〈初出版〉を挟む『大法輪』（一九五五）の文章で善麿は、「私は親鸞の苦しみというものが、もちろん十分にわかったとはいえないけれども、結局、一平凡人として愚禿釋親鸞、そこが聖人の偉さで、親鸞を非常な聖人として感じるよりも、あたりまえの大きな『人』というぐあいを考える方が、親鸞としてもむしろ本懐ではないかと思っっているのです。（五六頁）」と語っている。

冒頭の田植え歌は、親鸞が里人と一緒に田植えをしながら歌ったとされ、恵信尼、親鸞夫婦の生活を髣髴とさせる。生活者としての親鸞、恵信尼を表現したのは、「生活派」短歌の開拓者、土岐善麿の面目躍如といえる。

五―四、「観音の化身」としての後シテ

〈改稿版〉への最も大きな変更は後シテを「観音化身」

にしたことである。後場の六〇〇字程度の詞章を、後シテの人格を山括弧の中に示しながら、読み解いてみよう。

風吹く月夜、ワキの僧は、茅のひさしの奥から聞こえる親鸞の「述懐」を聞く。「述懐」を唱える後シテは（親鸞）である。現れた姿を見ると、天冠と舞衣をまとっている。地謡が「さながらなりや救世菩薩、夢想のすがた示現して〔…〕」と驚いてこの〈救世観音〉を迎える。続いて、六角堂の救世観音は「和国の教主」である（聖徳太子）となつて「誓願疑ふことなかれ」と親鸞に語り掛ける。

「ゆかりは深し四句の偈の、女犯の訓へ聖人も、尼公もたがひに化身を信じて、〔…〕、踊躍歡喜の舞の袖」の部分には、「夫も妻も、たがいにそれぞれその関係に観音を感じつつ、精神的に敬愛の生活を送った（土岐一九六三、一五頁）」ことを表現しており、この場面の後シテは（親鸞）であり（恵信尼）であり、舞は二人の舞、舞のよろこびを「弥陀観音大勢至」と讃嘆するのも二人と解釈される。次に「真実報土の」と語り始めるシテは（恵信尼）と思つてよさそうである。地謡の「救世観音と仰ぎまつれば、非僧非俗愚禿釈、親鸞聖人にましますかや」は（恵信尼）の言葉である。弥陀の慈悲のもとでの夫婦の敬い合い、支え合いこそは、本作品の眼目である。

後シテを「観音化身」にしたのは、回向を頼んで成仏するという典型的な複式夢幻能とは異なり、成仏の約束され

ている浄土真宗の教義を忠実に生かそうとした結果だが、善磨が〈初出版〉の時点で書いていた「親鸞聖人の言葉に、一人でいるときは二人と思え、二人でいる時は三人と思え、その一人は親鸞だと、こういうことを言っておられる。あの気持ちを作品の中で感じさせることができれば、今までにそういう曲はなかったのだし、おもしろくはないかというわけです（土岐一九五五A、五六―六〇頁）」という構想は、ここに実現されたと言えるだろう。新作能「親鸞」が拓いた新しい表現であり、ここに善磨の「宗教世界の追究」の極まりを見ることが出来る。

五―五 「述懐」を節をつけずに語る演出

謡本冒頭の解説の「舞台の経過」には「後シテの出の『述懐』は、現行曲中に類例のない謡い方による新しい演出である」とあって、その意気込みが伝わる。謡本を開くと、「述懐」の部分には、節付のゴマ点がなく右わきに「(素声ノコトバ)」と書かれている。さらに、上部には「述懐の心、常のコトバにて云う」とある。「述懐」のことばの演出について、善磨は随筆「法楽縁起」（土岐一九六三B、一一―一二頁）で、詳しく語っている。

新作能「親鸞」が、交声曲『歎異抄』と並行して作られたことはすでに述べたが、善磨は交声曲を『歎異抄』第一章「絶対他力」をプロローグに、第二章「師承偏依」、第

三章「悪人成仏」、第五章「父母孝養」、第六章「同朋同行」、第七章「無碍一道」、第九章「踊躍歡喜」、第十章「無義為義」、第十三章「業縁業報」、第十四章「法恩謝徳」と十の楽曲で構成した。演奏は三百人ほどの大合唱で、ソロはメゾソプラノとバリトンとテノールである。

「述懐」は、「聖人の、同時にまた浄土真宗としての、最高至深の信仰、その体得の告白であることは、いうまでもない（一二三頁）」から歌詞に入れようと思ったが、「このことばは、聖人の『述懐的』なものであるから、ほとんど独語的に、むしろつぶやくように伝えられるべきはずのものである（同）」と考え直し、交声曲には入れず、新作能「親鸞」に託したというのである。そこで、後場の後シテの出の前に、「揚幕をあげた中で、本文どおりそのまま独語的に謡う――節をつけずに、また謡の「詞」のようでもなく、むしろ淡々と静かに発声することにした（二六頁）」。善磨は、この演出について「能楽の表現の様式として、おそらく他に類のないものとなるはずで、それだけに演者の苦心があり、他力本願の最奥的究極処ともいえるべき「信」の一念が、どう観客にひびき伝わるか、そこに作者のひそかな意図があることをいっておきたい（同）」と語っている。「宗教世界の追究」の極まりを託す表現と言えるだろう。上演パンフレットには「従来に類のない謡い方であり、信楽の念にひたり得る見聞の一場面であろうと思われる」とあ

る。善麿が特に強調した特色である。

なお、交声曲「歎異抄」は新作能「親鸞」の上演に先立って、一九六一年四月十六日に、京都の文化会館で演奏された。

五一六 浄土真宗の教義を具現する複式能

上記の通り、新作能「親鸞」は、善麿の理想とした浄土真宗の一曲となった。後シテを「観音の化身」とする方法で、前場と後場で構成される複式能に仕上げる事ができた。謡本の「曲趣」には、「後場は、『歎異抄』にするされた聖人の『述懐』の語が最高至深の信仰告白として感動的にかかれ、ついでいわゆる『六角夢想』のことに入り、舞となるのであるから、静かに強く、花やかに気だかく、浄土真宗開頭のよろこびが満ちあふれる一段である」と書かれている。また、上演当日用のパンフレットの最終ページの「新作能「親鸞」について」（一九六一B）には、作品成立の経緯と現在の思いが語られている。即ち、喜多実との新作能の第一作は「聖徳太子のご事績」に基づく「夢殿」で、戦時下の「顕如」、交声曲「蓮如」と浄土真宗に関係する作品を作ってきたが、「第一に、祖師聖人の行実を伝えることが責任でもあり義務でもあるように感じていた」と書き、「それだけに、これが京都本願寺の由緒ある能舞台上のぼることは、まことに本懐であらう」というのである。

改めて詞章に戻ると、最後の地謡（コーラス）の「かくて三願転入の、他力本願真宗の、あけぼのの空を仰ぐなり、あけぼのの空を仰ぐなり」は、観音化身の親鸞、恵信尼、そして、この世のすべての人に「静かに強く、花やかに気だかく、浄土真宗開頭のよろこびが満ちあふれる（謡本）冒頭の「曲趣」」ことが意図されているようである。

善麿は、会心の「真宗物」として「親鸞」を完成し、宿願の東本願寺の能舞台の観覧席で親鸞聖人の七百回御遠忌の式能としてこれを見た。善麿の「親鸞」上演」と題した短歌十首より、その感動の伝わる三首を引用する。

大遠忌七百年の春にして 新作能「親鸞」を法楽とせり
 能楽の道を正しく踏み来つつ かのシテもまた信楽の人
 おのずから父母孝養ともなりぬべし 年たけてわれの
 能ぞ舞わるる

一首目は善麿自身、二首目は喜多実で、「法楽」も「信楽」も、宗教的な至上の幸福感を指す。「父母孝養」は「歎異抄」のことばである。これ以上の幸福はないと思つた善麿は、生家の等光寺、そして亡き父母を思つたのだろう。善麿は両親に、やんちゃな次男坊が幼い頃からの両親の教えを大切に信楽を得たことを報告して感謝を伝え、恩に報いたのではないだろうか。

六、おわりに

善麿は早稲田大学で上代文学の講義を終えると、数名の学生と近くの喫茶店でコーヒーを飲みながら語り合うのを楽しみにしていたようで、そんな折の会話の一部を随筆「老若問答」（土岐一九六三B、二五一～二五頁）に書いている。恋愛について聞かれて「男女が特定の事情のもとで相互に尊敬しあうことさ」と答え、学生たちを「ふしぎそうな表情」にさせた（二五二頁）とある。

一九六五年、八十歳になる年の春から善麿は武蔵野女子大学文学部日本文学科主任教授となったが、その助手を務めた平井奈々子（一九八〇）は、卒業後に結婚すると報告した学生に対し善麿が「ボクはこんなような、はれやかな心持を持ち続けられるような二人として、生きていくことが大切ではないかと思うんだよ」とやさしく話し、自作の短歌から「いま遂にここに来れりと並びたち 見さくる空の春のあかるさ」という一首を書いた色紙を贈ったエピソードを綴っている。どちらが主でも従でもなく、並び立って共に空を見上げる二人であることが、善麿の結婚観であった。こんな話を聞きながら、平井（一九八〇）は「一生の教えを授かった」と書いている。

一九五九年に金婚式を迎えた善麿は「金婚記」と題した一四ページにわたる随想（土岐一九五九B、二五六～二六九

頁）に妻、タカとの五十年を振り返り、人生の歧路にはいつもタカの応援や協力、ときに誘導があつて充実した老境に到ったことを感謝をこめて綴っている。戦争中、時局に合わせた短歌を作った善麿を、戦後早期にいさめたのもタカであった。『夏草』（一九四六）の「あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻のさびしげにいふ」は有名である。

親鸞と恵信尼が相互に敬い合っていたことに感銘を受けた善麿が、そこにタカと自分を重ねて意識したことはあつたに違いない。親鸞と恵信尼も、善麿とタカも二人で長寿を全うした。作品は生き方を表すとする「生活派」の歌人、善麿の「叙事詩的抒情」は、浄土真宗の新作能「親鸞」の表現にも貫かれている。

【注】

- (1) 『新作能縁起』（一九七〇）に収録されているのは「夢殿」、「顕如」、「青衣女人」、「実朝」、「秀衡」、「四面楚歌」、「鶴」、「使徒パウロ」、「親鸞」、「復活」、「鑑真和上」、「綾鼓」である。戦時色の濃い「和氣清麻呂」、「正行」、「元寇」、また上演が断念された「利休」は除かれた。なお、「綾鼓」は古典能の改作である。「綾鼓」成立の経緯は岩城（二〇一八）に詳しい。同論文は、「綾鼓」を中心に、土岐善麿と喜多実の共同による新作能創作の経緯を戦時下の能のあり方と

の関係から論じている。

- (2) 仏教を扱う「顕如」「親鸞」「鑑真和上」に加えてキリスト教を扱った「使徒パウロ」「復活」が典型で、聖徳太子奉讃を旨とした「夢殿」もその源と考えることができる。
- (3) 冷水茂太「編」(一九八三)は土岐善麿の年譜としては最も詳細なものといえるが、編者の関心は専ら歌人としての善麿にあり、新作能ほか短歌以外の活動については漏れや誤りが少なくない。善麿の著作で確認できることがらは、著作に当たった。
- (4) 河路(二〇二〇)では、新作能「青衣女人」と土岐善麿の一九四〇年代について論じた。
- (5) 善麿が定年を機に書齋生活に入った背景には、大日本歌人協会解散の一件もあった。善麿の定年記念の歌集『六月』をきっかけに、善麿が理事を務める大日本歌人協会が「反時局的」だとして、太田水穂、吉植庄亮、斎藤瀏が解散勧告を行い、善麿が議長を務めた臨時総会で解散を決議したのである。善麿はこの後、歌壇と距離をおいた。
- (6) 善麿は戦争で家財もろとも家を焼失し、娘婿を失った。また、戦争中、歌壇と距離をおいたとはいえ、戦意高揚につながる短歌や国民歌謡を作り、戦争協力をしなかったとは言えなかった。
- (7) 善麿は一九四五年四月号の『短歌研究』に戯曲仕立ての「実朝」を「随筆的作品」として発表した。
- (8) 土岐善麿「談」木俣修「編」(一九五八)ほか。木俣修は「人生派」ということばを使っている。
- (9) 石川啄木「一利己主義者と友人との対話」より
- (10) 親鸞と恵信尼の結婚の時期については、流罪後に越後でという説が長らく主流であり(梅原隆章一九五一ほか)、善麿もそう考えていた(土岐一九六二、八頁)。現在でも、この説をとる人もいるが(平雅行二〇一一など)、今井雅晴(二〇〇四、二〇一二ほか)、亀山純生(二〇一二ほか)は、諸史料から恵信尼は京都で親鸞より早くから法然の教えを受けており、京都で親鸞と結婚、親鸞と共に越後に赴いたとしている。そう考えると、結婚の時期は、元久二(二二〇五)年が有力となる。
- (11) 「そくばく」の部分は異同があり、現存する最古の『歎異抄』である蓮如書写本では「それほど」、次に古い永正本では「そくばく」である。本願寺派(お西)は前者、大谷派(お東)は後者に依拠している。善麿が後者に基づいたのはこのためである。善麿は〈初出版〉では「そくばく」と書き、〈改稿版〉で永正本の通り「そくばく」と改めている。
- (12) 『御伝鈔』にある弁円涸度の物語は、本稿第五章第一節で取り上げる。
- (13) 『撰取の能面』には「夢殿」「顕如」「青衣女人」「実朝」「秀衡」「親鸞」「綾鼓」が収録されている。
- (14) 弁円涸度の物語は間狂言で語られたようで、武蔵野大学文

学部所蔵の資料の中に「新作能親鸞 間 茂山千之丞作」と書かれた問狂言の台本がある。田楽法師の甲と乙が弁円の伝説を語り、親鸞の遺徳を偲ぶという内容である。

- (15) 作家の田村とし子、中村屋の相馬黒光、女優の松井須磨子、画家の長沼(後の高村)智恵子、美容家の寺本みち子、医師の池内澄子、歌劇歌手の柴田(後の三浦)環らが取り上げられている。

- (16) たとえば、池田弥三郎らによるインタビュー(一九七八)で、九十を超えた善磨は「妻のタカについて」よく来てくれた、よく結婚したもんだなああって気持ちが僕には今でもしてるんですよ。(二八五頁)と語り、女房をどなりつけるなどということはしたことがない(二八九頁)と語っている。

- (17) 歌集『四月抄』(一九六三)の五三―五六頁。続いて「交声曲 歎異抄」の五首が並んでいる。何の断り書きもないが、善磨はこの歌集より仮名遣いを現代仮名遣いに切り替えた。

- (18) 長男の土岐健児(一九八〇)も「朝日新聞社定年後は、書齋の人になることをしきりにすすめ」たのも、贅沢な日本舞踊に心惹かれる善磨を新作能に向かわせたのも母、タカであったと述べている。

【参考文献】

池田弥三郎・加藤守雄・岩松研吉郎・金井広秋・友尾豊・野村伸一・

本井英・八木光昭(一九七八)「土岐善磨研究〔最終回〕」『短歌』八月号、二七六―二九七頁

石川啄木(一九五〇)『石川啄木集(下)』新潮文庫

今井雅晴(二〇〇四)『親鸞と恵信尼』自照社出版

今井雅晴(二〇一二)『現代語訳 恵信尼からの手紙』法藏館

岩城賢太郎(二〇一八)「喜多流「綾鼓」の成立と土岐善磨・喜

多実協同の新作能創作・喜多流の戦後復興との関わりから」『武

藏野文学館紀要』八号、一〇七―一三五頁

梅原隆章(一九五二)『親鸞伝の諸問題』顕真学苑

亀山純生(二〇一二)『災害社会』・東国農民と親鸞浄土教――

夢から解読する(歴史に埋め込まれた親鸞)と思想的意義

農林統計出版

河路由佳(二〇二一―二〇二三)「土岐善磨の一九五〇年代(一)

―(十)―(隔月刊行の短歌誌『新暦』二〇二一年七月号―二〇

二三年一月号に連載) 新暦短歌会

河路由佳(二〇二〇)「新作能〈青衣女人〉の初演(一九四三)

と再演(一九四九)の間―土岐善磨の戦中戦後―」『武藏野文

学館紀要』一〇号、一九―四〇頁

喜多実(一九六一)「五十年目の本願寺のお能」『喜多春秋32』、

二頁

喜多流刊行会(一九六一)『喜多春秋32』喜多流刊行会(一九六

一年四月)(*武藏野大学蔵)

沙加戸弘(二〇二〇)『はじめてふれる親鸞聖人伝絵(御伝鈔)』

御伝絵」東本願寺出版

茂山千之丞（二九六一？）「新作能「親鸞」問狂言詞章」（*武蔵

野大学蔵）

真仏寺「編」（？）『親鸞聖人御旧跡 真仏寺略縁起』真仏寺

平雅行（二〇二二）『改訂 歴史の中に見る親鸞』法蔵館文庫 8

田中充「編」（一九六五）『未刊謡曲集（三）』古典文庫二二二、

古典文庫

田中充「編」（一九六六）『未刊謡曲集（六）』古典文庫二二七、

古典文庫

田中充「編」（一九七二）『未刊謡曲集（一九）』古典文庫二九七、

古典文庫

田中充「編」（一九八七）『未刊謡曲集（続一）』古典文庫四九一、

古典文庫

田中充「編」（一九九〇）『未刊謡曲集（続六）』古典文庫五二〇、

古典文庫

田中充「編」（一九九三）『未刊謡曲集（続十二）』古典文庫五六三、

古典文庫

千葉乗隆「訳注」（二〇〇二）『新版 歎異抄（現代語訳付き）』角

川ソフィア文庫

戸川秋骨（一九五〇）『謡曲物語（中学生全集二〇〇）』（筑摩書房）

土岐善麿（一九四二）『新作能「顕如」喜多流謡本刊行会

土岐善麿（一九四四）『能楽新来抄』甲鳥書院

土岐善麿（一九四六）『夏草』新興出版社

土岐善麿（一九五〇）「新作能「親鸞」『喜多』（第四輯新春号）

喜多流刊行会、一六〜一七頁（*武蔵野大学蔵）

土岐善麿（一九五四）『Japanese No Plays』日本交通公社

土岐善麿（一九五五）『撰取の能面』大法輪閣

土岐善麿「談」木俣修「対談と註」（一九五八）「対談・近代短歌

の歩み 人生派の源流」『短歌』六月号、角川書店、一一二〜

一三五頁

土岐善麿（一九五八 A）『歴史の中の生活者』春秋社

土岐善麿（一九五八 B）「短歌は誰のためのものか」『短歌研究』

一九五八年六月号、六〜九頁

土岐善麿（一九五九 A）『相聞抄』春秋社

土岐善麿（一九五九 B）『ことは風土記』光書房

土岐善麿（一九六〇）『額田抄』初音書房

土岐善麿（一九六一 A）『親鸞（喜多流謡本）』喜多流刊行会（*

武蔵野大学蔵）

土岐善麿（一九六一 B）「新作能「親鸞」について」『親鸞聖人七

百回大遠忌 本願寺式能（新作能親鸞初演パンフレット）昭和

三十六年四月二十九日 本山能舞台（*武蔵野大学蔵）

土岐善麿（一九六一 C）「某月某日」『在家仏教』五月号、一七頁

土岐善麿（一九六三 A）『四月抄』東峰出版

土岐善麿（一九六三 B）『目前心後』東峰出版

土岐善麿（一九六四）「親らんと恵心尼」『真理（仏教の生活）』

十月号、真理運動本部、七〜十一頁

土岐善麿（二九六五）『杜甫門前記』春秋社
 土岐善麿（二九六七）『老壮花信』東京美術

土岐善麿（二九七六A）『新作能縁起』光風社書店

土岐善麿（二九七六B）『天の原ふりさけみれば』蝸牛社

土岐健児（二九八〇）『父のこと二・三』『周辺（最終号）』土岐善

麿追悼特集号』周辺の会、二二八～二二九頁

西野春雄（二〇〇五）『新作能の百年（1）一九〇四年～二〇〇四年』

『能楽研究…能楽研究所紀要』第二九号、法政大学能楽研究所、

一四二～一二二頁

冷水茂太編（二九八三）『土岐善麿（人物書誌体系5）』日外アソ

シエーツ

平井奈々子（二九八〇）『愛妻物語』『周辺（最終号）』土岐善麿追

悼特集号』周辺の会、二二二～二二四頁

増田正造（一九八〇）『土岐先生の能』『喜多（昭和五十五年／夏）』、

二八～三〇頁

真鍋廣濟〔編〕（一九六三）『親鸞文学集』古典文庫一八九、古典

文庫

【謝辞】土屋忍先生、岩城賢太郎先生のご厚意で武蔵野大学文学

部日本文学文化学科所蔵の土岐善麿の新作能「親鸞」関係の

資料や「親鸞舞台写真」を閲覧させていただきました。また、

岩城先生には多くをご教示いただきました。そして、人間学・

思想史の観点から親鸞を研究している武蔵野大学仏教文化研

究所客員研究員の亀山純生先生には、新作能「親鸞」の読み

解きについて、多方面から具体的なご指導を賜りました。心
 より感謝申し上げます。

【資料】土岐善麿作 新作能「親鸞」の詞章の新旧対照表

作成：河路由佳

<p>初出版（一九五〇）</p> <p>『喜多』（一九五〇）、『大法輪』（一九五五）、『撰取の能面』（一九五五）の三本を校合。</p>	<p>改稿版（一九六一）</p> <p>『額田抄』（一九六〇）、喜多流謡本（一九六一）、『新作能縁起』（一九七六）の三本を校合。</p>
<p>わき 衣手冷ゆる草枕、衣手冷ゆる草枕、常陸の国に急が ん。これは北国方より出でたる僧にて候。さてもわ れ久しく難行の小路に迷ひ、今は易行の大道に赴き て、祖師聖人のおんあとを慕ひ、遺跡参拝の旅に出 で立ちて候。これより稲田にまゐらばやと思ひ候。 筑波嶺の、このもかのもをたどり来て、このもかの もをたどり来て、君がみかげのあづま路や、よしや 芦穂の山つづき、あふぐ笠間の雲ひろみ、みのりの 秋の稲むしろ、かたしく袖も露しげき、稲田の里に 着きにけり。稲田の里に着きにけり。（問狂言）</p>	<p>ワキ これは、都方より出たる僧にて候。さてもわれ久し く難行の小路に迷ひ。今は易行の大道に赴き、親鸞 聖人のおんあとを慕ひて、遺跡巡拝を志し候。 さて、このところを人に問へば、常陸の国稲田の里 と申し候。げに頼もしや植ゑ急ぐ、田の面ゆたけき ながめかな。</p>
<p>して 面白や里人が、ひとつおほえの田植歌。今に伝へて 聖人の、その恩徳の落穂拾ひ、いでいでわれも袖と めて、 同音 五劫思惟の苗代に、五劫思惟の苗代に、称名の水を かけそへて、 して 往生の秋になりぬれば、 同音 このみをとるぞうれしけれ。げにや荒小田を、あら すきかへしかへしても、あらすきかへしかへしても、 見てこそやまめ人心。</p>	<p>シテ おもしろや里人が、昔ながらの田植歌、今に伝へて 聖人の、その恩徳も深緑、いでいでわれも諸共に、 同音 五劫思惟の苗代に、五劫思惟の苗代に、称名の水を かけそへて、 シテ 昼夜にそだつ信樂の、</p>

<p>して 山ほととぎす啼くころは、朝より急ぐ苗代に、立つ さざなみも濁るらん。 八束の垂穂秋かけて、ひくや鳴子の遠近に、露散る 風のむらすずめ。 して 追ふ声は、 ほうほう。 同音 苧る鎌は、 同音 さやさや。苧りなおくれそ笠深く、立てる案山子の つづれさへ、くたしは捨てじ裾からげ、ひろふ落穂 のひとつだに、いただく法はかしこしや、いただく 法はかしこしや。</p>	<p>同音 みのりあまねき稲むしろ、かたしく袖も露しげし。 忘れめや別れ越路の浜風に、別れ越路の浜風に、ふ き送られて筑波嶺の、このもかもの影ひろみ、仰ぐ 笠間の空晴れて、思へばはるか荒磯に、はじめて播 ける法の種、めぐみゆたけく仮りの世に、よしや芦 穂の山なみも、へだては南無の一仏と、ひと粒をだ に惜しむなり、ひと粒をだに惜しむなり、</p>
<p>わき 不思議やな村人の、苧入れいそぐ秋景色、あら面白 と眺むるところに、落穂を拾ひ上臈の、立ちいでた まふはいかなる人ぞ。 して あやしめらるるもうつつなや。これは聖人の御在世 に、ふたよのちぎり恵信尼が、ありし姿とごらんぜよ。 さては遺跡巡拝の、報恩の奇特あらはして、見みえ 給ふぞありがたき。まこと恵信尼にてましまさば、 聞くも尊き下妻の、夢想を語りおはしませ。</p>	<p>ワキ 不思議やな村人の、田植すがたに立ちまじりて、立 ちいでたまふはいかなる人ぞ。 シテ あやしめらるるもうつつなや、これは聖人の御在世 に、ふたよのちぎり恵信尼が、夢の姿とごらんぜよ。 ワキ さては遺跡参拝の、報恩の奇特あらはして、見みえ 給ふぞありがたき。まこと恵信尼にてましまさば、 聞くも尊き下妻の、夢想を語りおはしませ。</p>
<p>して さればこそいつとなく、人や伝へし夢の告、ただか しこさに秘めおきしを、あまり尊くおほけなく、 わき 後のかたみと都辺に、 して 書き送りつる不思議さを、</p>	<p>同音 そもそも恵信尼下妻の夢想と申すは、北国の配所を 出で給ひし、親鸞聖人にかしづきつつ、 シテ 関東教化同行の、 同音 信心深くいますところに、ある夜のくしき夢枕。</p>

<p>わき 申すべし。 あらあら語り、 申すべし。 そもそも恵信尼下妻の夢想と申すは、北国の配所を出でたまひし、親鸞聖人にかしづきつつ、 関東教化同行の、 信心深くいまずとところに、ある夜のくしき夢枕、 げに夢こそは、 まことなれ。いづくとも、いつともわからぬ堂供養。試楽ゆゆしく虚空には、華表のやうなるすがたにて、二幅の絵像かかりたり。その一幅は形なく、ただ赫奕と拝まるる。これをいかなる御仏と、かたへに聞けば大勢至、菩薩は智慧の光明にて、法然上人の御事なり。さてまた別の一幅は、大慈大悲の観世音、これぞまさしく善信の、御房とさとり仰ぎしが、わが夫をいかで菩薩とは、あまり畏き現なれば、化身垂跡の尊容を胸に畳みつつ、渴仰の念いよいよ、年月を送るばかりなり。</p>	<p>して 同音 かかれは大師聖人、 流刑に処せられ給はずは、われまた配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずば、辺鄙の群類も化し難しと、稲田に杖をとどめ給ふ。思へば夢の通ひ路の、超世の悲願あら尊と。たとひ念仏を、唱へて地獄に墮つるとも、廻心の桜の返り花、さどりの秋の一枝と、指さす影は消えにけり、指さす影は消えにけり。 (中入り)</p>
<p>シテ 同音 げに夢こそは、 まことなれ。いづくとも、いつともわからぬ堂供養。試楽ゆゆしく華表には、二幅の絵像かかりたり。その一幅は形なく、ただ赫奕と拝まるる。これをいかなるみ佛と、かたへに聞けば大勢至、菩薩は智慧の光明にて、法然上人の御事なり。さてまた別の一幅は、大慈大悲の観世音、これぞまさしく善信の、御房と仰ぎさとりしが、わが夫をいかで菩薩とは、あまり畏き現なれば、化身垂跡の尊容を胸に畳みつつ、渴仰の念いよいよ、年月を送るばかりなり。</p>	<p>シテ 同音 かかれは大師上人、 流刑に処せられ給はずは、我また配所に赴かんや。もし我配所に赴かずば、辺鄙の群類も化し難しと、稲田に杖をとどめ給ふ。思へば夢の通ひ路の、超世の悲願あら尊と。たとひ念仏を、唱へて地獄に墮つるとも、廻心の桜の返り花、悔いはあらしの一枝と、指さす影は消えにけり、指さす影は消えにけり。 (中入り)</p>

<p>わき 伝へ承る、聖人つねの仰せには、ありがたや弥陀の、 五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一 人がためなりけり。さればそこばくの業を持ちける 身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本 願のかたじけなさよのご述懐。 同音 今もうつつに聞え来て、今もうつつに聞え来て、夜 も更け渡る風のおと、そよぐ稲葉のすゑの世に、ま ざれぬみ声あきらかに、さし入る月の露しぐれ、茅 のひさしの奥深く、さながらなりや救世菩薩、夢想 のすがた示現して、白衲の袈裟白蓮華、端座ましま す莊嚴は、六角堂の春の夜に、結びたまへる夢をまた、 露の照日の恵信尼が、枕に通う法悦の、撰取不捨の ご誓願、信衆の奇瑞かしこしや。</p>	<p>わき ありがたや庭上の、廻心の桜を見るにつけても、一 向専修のともがらに、廻心はひとたびありとかや。 して げにもげにも廻心とは、日ごろ本願他力を知らざる もの、弥陀の智慧をたまはりて、頼むこころのひと すちに、 柔軟忍辱の思ひを得て、 わき ただほればと深重なる、弥陀のご恩のありがたさよ。 わき 念仏申すも自然なれば、 して わがはからひのなきをこそ、すなはち他力と申すな れ。 わき かの板敷の、</p>
<p>ワキ 夜も更けわたる風のおと、 同音 夜も更けわたる風のおと、そよぐ稲葉のすゑの世に、 さし入る月の露しぐれ、茅のひさしの奥深く、まぎ れぬみ声あきらかに、 シテ ありがたや弥陀の、五劫思惟の願をよくよく案ずれ ば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそく ばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんとお ぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。 同音 さながらなりや救世菩薩、夢想のすがた示現して、 端座まします莊嚴は、六角堂の春の夜の、あらたな りける奇瑞かな、あらたなりける奇瑞かな。</p>	<p>ワキ 有難や伝へ承る、和国の教主の本地とて、救世観音 のおん告に、 シテ 行者の宿報を説き給ひて、 ワキ 臨終引導生極楽、 シテ 誓願疑ふことなかれ。</p>

<p>して 同音 弁円が、 山伏すがた弓箭<small>きやうせん</small>に、山伏すがた弓箭に、自力の太刀 をふりかざし、あやめもわかぬみあとを追ひ、峰に のほれば念仏の、み声は霧のふもとにあり。ふもと に待てば峰にきこえて、さすが罪業悪心の、すべも あらしの夕闇に、この禅室に來りしが、無礙<small>むげ</small>一道の 尊顔に、向ひまつればたちまちに、後悔<small>うがひ</small>の涙おきあ まる、柿のころもの袂<small>たもと</small>さへ、素懷をとげし縁とかや。 踊躍<small>うやく</small>歡喜の、 舞の袖。 (舞)</p> <p>同音 弥陀のみ船に法の海、弥陀のみ船に法の海、生死<small>しやうじ</small> の浪に、 浮きつ沈みつ、 して 同音 眞実報土の、 岸に到れば、 して 同音 煩惱の雲はやくも露<small>は</small>れて、法性<small>ほふじやう</small>の月すみやかに、か がやきかがやく白蓮華<small>びやくれんげ</small>、救世觀音<small>ぐせ</small>と仰ぎまつれば、 落穂<small>おとし</small>を拈<small>ねん</small>ずる御微笑<small>おんびしやう</small>、愚禿<small>ぐとく</small>釈<small>せき</small>の親鸞<small>しんらう</small>なり。これぞ三 願<small>さん</small>転入<small>てんにゅう</small>の、教行信証<small>けうぎやうしんじやう</small>のみ筆<small>ふで</small>のあと、あとやさきなる 露<small>つゆ</small>しづく、暁<small>あけぼの</small>の空となりけり、暁<small>あけぼの</small>の空となりけり。</p>	<p>して 同音 ゆかりは深し四句<small>しご</small>の偈<small>げ</small>の、女犯<small>にょはん</small>の訓<small>おし</small>へ聖人<small>せいじん</small>も、尼公<small>にこう</small> もたがひに化身<small>けしん</small>を信じて、ただほればれと感涙<small>かんだい</small>の 踊躍<small>うやく</small>歡喜<small>かんぎ</small>の 舞の袖。 (舞)</p> <p>同音 舞の袖。</p>
<p>シテ 同音 弥陀<small>みだ</small>觀音<small>くわんおん</small>大勢<small>だいせい</small>至 大願<small>だいがん</small>の船に乗じてぞ、生死<small>しやうじ</small>の海に浮みつつ、衆生<small>しゆじやう</small>を 呼<small>よ</small>ばうてのせたまふ。 眞実報土<small>しんじつほうど</small>の、 シテ 同音 岸<small>きし</small>に到れば、かかやきかかやく白蓮華<small>びやくれんげ</small>、救世觀音<small>ぐせ</small>と 仰<small>おほ</small>ぎまつれば、非僧<small>ひそう</small>非俗<small>ひぞく</small>愚禿<small>ぐとく</small>、親鸞<small>しんらう</small>聖人<small>せいじん</small>にましま すかや。かくて三願<small>さん</small>転入<small>てんにゅう</small>の、他力<small>たうりき</small>本願<small>ほんがん</small>眞宗<small>しんしゆ</small>の、あけ ぼのの空を仰<small>おほ</small>ぐなり、あけぼのの空を仰<small>おほ</small>ぐなり。</p>	<p>同音 ゆかりは深し四句<small>しご</small>の偈<small>げ</small>の、女犯<small>にょはん</small>の訓<small>おし</small>へ聖人<small>せいじん</small>も、尼公<small>にこう</small> もたがひに化身<small>けしん</small>を信じて、ただほればれと感涙<small>かんだい</small>の 踊躍<small>うやく</small>歡喜<small>かんぎ</small>の 舞の袖。 (舞)</p> <p>同音 舞の袖。</p>